



Title	ジョン・ヴェルカーの空間計画 : 1956年「これが明日だ」展をめぐって
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョン・ヴェルカーの空間計画 —1956年「これが明日だ」展をめぐる—

吉村 典子 宮城学院女子大学

はじめに

1956 年ロンドンのホワイトチャペル・ギャラリーで開催された「これが明日だ」展といえば、多くが「ポップ」、あるいは、リチャード・ハミルトン (Richard Hamilton, 1922–2011) の《一体何が、今日の家庭をこれほどに変え、魅力あるものになっているのか?》(以下《一体何が…》と表記) のことを想起するであろう。しかし、同展参加の 12 グループのうちの「グループ 2」(以下 G2 と表記) をハミルトンと共にした建築家ジョン・ヴェルカー (John Voelcker, 1927–1972) のことはあまり論じられてきていない。ヴェルカーとは、G2 の展示空間の中央に聳え立つ構造物を設計した人物である。

近年、ヴェルカーの遺族により、この構造物の完成に至るまでの書簡や図面等が、ホワイトチャペル・ギャラリー古文書室に提供された (以下「ヴェルカー資料」と呼ぶ)。これを分析すると、ヴェルカーのことはもちろん、G2 展示の詳細、さらには、同時代の建築空間計画との関係もみえてくる。

1. G2 の「知覚」と「表象」

ハミルトンの作品には、《一体何が…》にみるように、鍵語をリストし、それにかかわる表象を集めて構成するという手法が、50 年代から 60 年代を中心にみられ、G2 の展示においても、構想時に「表象」(imagery) と「知覚」(perception) という鍵語を掲げている。リストは「ヴェルカー資料」にも確認できた。おそらくハミルトンが、ヴェルカーにわたしたものであろう。

このうちの「表象」、つまり、彼らの言う「ポッ

プ」にあたる部分ばかりが後世に伝えられてきているが、G2 は、知覚の問題も、もちろん表象と知覚の両方にも、さらには双方の違いにも意識を置いていることが、展覧会図録の G2 の頁に掲載されたダイアグラムからもわかる。そこから読み取れることは、写真、テレビやラジオが、人間の知覚では捉えられないほぼ地球上のすべて、時には宇宙におよぶ範囲を捉え、その表象を提示し、それは、我々人間が、目や皮膚、耳や口で知覚しているそれとは違う映し出し方であること、つまり、視覚的なことと光学的なことの違いがあることである。この違いが、展示の柱とした「知覚」と「表象」ということになる。そのうちの「知覚」がコアにあると考えられるのが、ヴェルカーの構造物である。

2. ヴェルカーの「知覚」の構造物

「ヴェルカー」資料の中に、ある幾何学図が見つかった。その図様は、当時イギリスにおいても高まりを見せていた構成主義的図形を思わせるものであるが、よく見ると、G2 の構造物の壁面の形と重なり合う部分があり、実際に線の部分を折り曲げていくと、構造物の形になるのである。つまり、G2 の構造物は、建築図面からではなく、幾何学図からできているのである。また、「ヴェルカー資料」の書簡の以下の引用部分から、造形的には幾何学で構成しつつも、コンセプトとしては、前述の「知覚」がかなり意識されたものであることがわかる。「連続する空間を使つての試みであり (中略) あらゆる感覚つまり、視覚、聴覚、触覚、バランス感覚等を使うことである。連続する通路

で人々は歩いたり上ったりできる。そうした通路は因襲的なカテゴリーに当てはまらない、つまり、入場者が動くにつれ、床が壁となるし、天井が床ともなるのである。」ハミルトンが提示したG2のコンセプトの一つ「知覚」を活用する空間にしようとしたことがわかるし、一般的な建築にみる、壁や天井等により空間をつくるという概念をも排除しようとしていたことが読み取れる。

実際に会場につくるために作成された設計図をみると、構造物の中のレイアウトがわかる。構造物内の部屋をつくる区画には直角のコーナーはなく、また、どの入口からみても我々が見慣れた透視図的な空間の視覚体験とは異なる空間が提示され、さらには床の段差や下がり天井等もある。平衡感覚が狂った状態を描いた『カリガリ博士の箱』に準えて、ハミルトンが言い表した「ヴェルカー博士の箱」は、一般的な通念には当てはまらないこの構造物の空間構成を指してのことであろう。

また、G2をともにした美術家ジョン・マクヘイル (John McHale, 1922-1978) は、この構造物に取り付けた回転ディスクをアメリカ滞在中に入手している。これはプロトタイプが1923年に遡るデュシャンのロトレリーフ、つまり「平面上の動きを通して空間の中に形態を創出する」ものである。その周囲のオブ・アートを想起させるような造形群も含めると、この構造物とその内外は、人間の知覚のメカニズムつまり、入場者自らの知覚によって成り立つ場と位置づけられる。

3. ヴェルカーの空間計画と1950年代の英国

ヴェルカーは、1944年より英国建築協会付属建築専門大学で学び、その頃から、イギリスの近代建築思想の奔流に関わり、CIAM（国際近代建築会議）にも参加していた。しかし、同志とともに、CIAMの、特に「アテネ憲章」の内容に批判を表明するようになり、人間中心の動的なアーバニズムを強調していく。それが、1959年のCIAM解体に導くことになる。ここにみるようにヴェルカーは、建築と社会・人間との関係を意識しており、卒

業後に取り組んだ「ルーラル・アーバニズム」においても、空間における人的関わりを重視しつつ、農業の現場における設備や建築の近代化を推し進めている。

住宅も手掛けており、英国のジャズ・トランペット奏者ハンフリー・リトルトン (Humphrey Lyttleton, 1921-2008) と彼の家族のために1957年に設計した住宅を例にみても、空間と人が関わり合い、かつ、空間と空間が連続的に、物理的な壁を越えてつながり合うこと、そして、計画の根底には、人間の行動がまずあることが確認できる。

これは、住宅のような建造物にみる空間だけでなく、戦後の英国の展示文化をみても、意識されていた点である。英国は戦後「イギリスはできる！」展、「英国祭」等の博覧会が開催され、展覧会が様々な趣旨と試みをもって展開されるなかで、展示の有りようが若い芸術家等の間では、作品作りとほぼ同じこととして問題視とされていた。絵画は壁に、彫刻は台座にという前提を問題視し、観者との関わりで空間を意識するようになり、彼らの間で「スペクテイターシップ」という言葉も使われるようになる。人が行動によって空間を認識、体験するというものである。ヴェルカーのG2の構造物は、そうした意識に対しても、具体的な例を「これが明日だ」展において示すものであり、その後の英国の展覧会においても影響力があるものであった。

おわりに

ヴェルカーの構造物は、「これが明日だ」展では、「ポップ」という「表象」に覆われたがために、後世にはその実態が見えにくくなっているのであるが、その「知覚」の空間がもつ本質は、戦後の展示文化をも含む空間計画において議論されていたことの具体をも提示するものであったと位置づけられる。